

【モータースポーツコラム】

筆者：段 純恵

【頑張れブランドン！米若手ドライバーに降りかかった災難】

コロナ禍が始まって以来、海外取材にまったく行けていない。この30年あまり、ル・マンだF1だインディだと飛び回っていたのがウソのような、国内にシフトした生活である。

海外情報の収集はオンラインがもっぱらとなり、その便利かつ渡航経費ゼロの有り難さを享受する一方、情報の取捨選択に頭をフル回転させる日々を送っている。

そんなある日、ジャパニーズ・ゴスペルバンド『ヘヴニーズ(HEAVENESE)』のリーダーにして著述家の石井希尚氏が主催するオンライン情報番組、『ヘヴニーズ・スタイル』で、サーキットから全米に広がったあるニュースについて知った。「頑張れブランドン」事件である。

昨年10月、アラバマ州で開催されたナスカーのXフィニティ・クラスで参戦3年目のブランドン・ブラウン選手(28)が悲願の初優勝を遂げた。その優勝直後のインタビューで中継テレビ局N B Cの女性レポーターが観客席を振り返り、



ブランドン選手悲願の初優勝

「頑張れブランドン(Let's go BANDON!)と言ってるのが聞こえますね」と言ったからさあ大変。実際に観客が叫んでいたのは「バイデンのくそったれ！(F*** Joe Biden!)」で、それが自宅の居間で中継を見ていた視聴者の耳にも届いたのである。

事実が捏造される瞬間が露わになったこのニュースは、SNS等を通じてあっという間に世界へ広がった。

いままネット上に散らばる動画の数々を見れば、反バイデンを表す流行語として「頑張れブランドン！」を口々にし、旗に書いて自宅の庭や窓に掲げてある様子などから、現政権の政策を冷ややかに見ている人々の不満が膨れ上がっていることが伺える。

しかし、レース中継していたNBC他の米大メディアがその後、この事件について触れることはなく（政権寄りの有力紙が捏造続報を流して火に油を注いだ）、それらを情報元としている日本の大マスコミも、保守系紙および同系列TV局のサイトで外部執筆者が自身のコラムでこの出来事を取り上げたが、その他のメディアが報じた形跡はない。

ナスカーは四輪市販車（ストックカー）に似せた純粋なレーシングカーによる米国独自のレースでF1やインディカーより人気が高い。トヨタ、シボレー、フォードがエンジンを供給し、カップ・クラスを頂点にピラミッド型にカテゴリーが層をなしている。



ブランドン選手が出場するXフィニティは、最高峰のカップに次ぐレベルのクラスで、他にもピックアップトラックの改造車で争うトラックシリーズがある。これには岡山県出身の元レーシングドライバーで、'95年に渡米し選手を経てチームオーナーとなった服部茂章氏(58)が率いるH R Eが参戦、活躍している。

今季のナスカーは2月半ばに開幕し、11月初旬までの毎週、南西部の州を中心に転戦し、N B Cなど三大T Vネットワークが持ち回りで全米向けにレースを中継する予定だが、一昨年ナスカー側がサーキット来場時に南軍旗（南北戦争時の南軍の旗）の持ち込みを禁じたところ、政治的に保守層でもある従来のファンが反発してテレビ視聴率はガタ落ちし、共和党の支持基盤である『レッドステート』を中心とした興行からの方向転換の難しさを知らしめた。

そんなナスカーのメジャー・クラスで初勝利を挙げたブランドン選手を待っていたのは、お祝いの言葉などではなかった。

昨年末、本人が寄稿した米ニューズウィーク誌の記事によると、自身が意図したわけでもない政治的混乱の渦に投げ込まれたブランドン選手は、自分やモータースポーツについての知識も興味も無かった人々が自分の名前を口々に叫び、ネットで取り上げ、見ず知らずの報道機関から取材申し込みが殺到する状況にただ困惑し、沈黙を守るしかなかったという。



「後援者がどう受け止めるかわからない」と本人が懸念したとおり、メインスポンサーは離れ、新たな後援者が現れたもののそれが仮想通貨だったことを理由にレース主催者としてのナスカー側が却下（仮想通貨の名称がLet's go Brandon Coinであることが本当の理由らしい）。

「僕の業界ではスポンサーなしに走ることなどありえない」と語っていたブランドン選手は、写真参照スポンサーロゴのない白いマシンで今季の開幕戦を迎えるしかなかったのである。



『スポーツと政治は切り離すべき』という論がいかに虚しいかは、五輪を例に挙げるまでもなからう。時速200マイルで闘うことを職業とし、政治について考える時間をあまり持たなかったというブランドン選手も、この数ヶ月間、否が応でも自分が住む社会について考え、現実に向き合うこととなった。

「ガソリン価格1ガロン4ドルが当たり前になっているいまの状況が良いとは思わない。何もかもが値上がりし、多くの人々が堅実な生活を築くことに苦労していることも知っている。政治的な闘争に興味はないし特定の誰かを支持するつもりもない。あなたが誰に投票するかについても興味はない。これからも自分の時間の99%はマシンを速く走らせるために費やすことに変わりはない。それでもこれから僕は我々が共有するこの問題について話すことを躊躇うつもりはない。僕を含む全米の人々にとって重要な問題に光を当てるためにも、僕は今シーズンの闘いに専念する。」



そう寄稿文を締めくくったブランドン選手は、その後エナジードリンク会社の後援が決定して苦境を脱出。3月末の第5戦から写真参照スポンサーカラーに彩られたマシンでレースに参戦している。

「どれだけ感謝してもしきれない。これまで以上にハードに、全力で闘っていく」。ナスカーらしく派手にペイントされたマシンの前で決意を新たにするブランドン選手の活躍を、遠く日本から願うばかりだ。



スポンサーカラーに彩られたマシン

ブランドン選手





(プロフィール)

段 純恵（だん すみえ）／大阪府出身 1964年生まれ
外資系銀行勤務を経た後、'90年からフリーランス・ライター活動を開始。

モータースポーツ専門誌を皮切りに、スポーツ紙、一般紙、自動車雑誌、企業HP等で活動。現在は自動車雑誌「ベストカー」本紙およびWebに世界耐久選手権（WEC）、国内スーパーフォーミュラ（SF）のレースレポート、インタビュー記事等を寄稿中。

